
 書 評

安藤 厚, 浦井康男, 望月哲男編

『ドストエフスキー『罪と罰』コンコードダンス(文脈つき用語索引)』

北海道大学スラブ研究センター発行, 1994, 1428p.

井 桁 貞 義

「コンコードダンス」(用語索引, 文脈付き索引)とは「ある作品中に含まれる主要な語をアルファベット順に並べ, あわせてそれが生じる一節を引用したもの」であるという。⁽¹⁾聖書語句辞典をはじめ, 西欧諸語で書かれた古典から現代にいたるまでの文学作品のコンコードダンスはすでに多く作成され, 利用されているが, 『プーシキン辞典』をのぞけばロシア語ではコンコードダンスと呼ばれるものはほとんどなく, 「その力を実感する機会が少なかった。」⁽²⁾

こうしたなか, 北海道大学文学部ロシア文学講座で, 平成2年度教育研究学内特別経費によるスラブ研究センターとの共同研究プロジェクト「ロシア文学の計量的分析へのアプローチ」で欧文用光学的文字読み取り装置を購入, ロシア語テキストデータベースの構築を始めた。⁽³⁾このプロジェクトの最初の成果が本書である。

全体で約176000件の単語から句読点と出現頻度の高い(1000回以上)16語を付録へ送り, 収録された単語は130597件, 重複を取り除き約25778語形という。読み取りデータの確認・修正に始まってスペルチェック, 編集, 印刷までの困難, 問題の克服, 処理のプロセスは注記の安藤氏, 浦井氏の報告論文に詳しい。コンピュータを駆使しての, 気の遠くなるような御苦心の結晶であるこの労作は, 日本ばかりでなく, 世界のロシア文学研究, そしてドストエフスキー研究の大きな転換点として, 研究史の中に永久に記されることになるであろう。

本文となるデータは見出し語のアルファベット順に配列されており, まず頻度が示される。各行はこの見出し語=キーワードを中心に置き, その語の左右の文脈が70字分取り出されており, これを見るだけで前後のコンテキストが分かるようになっている。さらに行の右側に, 30巻アカデミー版ドストエフスキー全集をもとに, 何処に現れるかが章, ページ, 行の順に表示され, 詳しく原文にあたる利用者に対して指示してくれる。

ドストエフスキー研究ではこれまでに, たとえば「突然」という言葉が頻出

することが指摘されてきた。このコンコーダンスで「вдруг」を引いてみる。すると『罪と罰』には総数564回この語が現れることが分かる。その出現のコンテキストは本書5ページにわたって延々と表示されている。本書の末尾に付された付録2「頻度辞典」で確かめると、「вдруг」は「Раскольников」に次いで35番目に多く使用されている語であることが分かる。これをソ連の一般の出版物を対象とした調査の結果を報告する『頻度辞典』のデータと比べてみる。それによれば「вдруг」の頻度順位は210番目に過ぎないから、『罪と罰』での使用が異常な値を示していると数値的な根拠に立つて言うことができる(ちなみに『罪と罰』の頻出10単語グループと『頻度辞典』の上位10語グループとは、順位に異同はあるが完全に一致している)。⁽⁴⁾「突然」と同じく「3」や「7」などの数詞の使用の頻度に着目した研究についても同様の確認が可能になった。⁽⁵⁾だが本書の威力はこうした「特定化された」問題にだけ発揮されるのではない。

本書の「まえがき」で望月哲男氏は指摘している。「絵画の線の意味を決定するのが周囲の線や面であるように、これらの（「突然」などの：引用者）語に特別なニュアンスを与えているのは、じつはその語自体ではなく、多数の類義語や反意語であり、さらに直接にはそれとは関係のない無数の語の総体である。しかるにある作品における特定の語の意味や用法を、他の語のそれとの総合的な比較においてとらえることは、個々の研究者の手仕事には余る作業である。」「われわれは多くの場合、全体を問題にすることができぬまま、特定化された部分について論じてきたのである。コンコーダンスはすべての語をひとたび均一なレベルで数量化されたデータとすることにより、逆に個々の語や表現の特殊性を論ずるための基盤を与えてくれるのである。」

じっさい、1400ページ以上にのぼる大判のコンコーダンスを手に取り、任意の箇所を読み始めただけでも、研究者（読者）の視野は拡大され、想像力は刺激されて、多様な分析、アプローチへと駆り立てられるに違いない。たとえば浦井氏は「крест」を例に挙げて次のように言う。『「罪と罰」における十字架（крест）のシンボル性を分析するといった場合でも、見出し語が крест とその変化形の項を探せば、作品中のこの語の全出現例が前後の文脈とともに示されるので、大まかな使用法を読み取ることができよう。』

筆者はこの小説に、登場人物のシステムのほかに、概念語のシステムが内在していると考えてきたが、「капитал」「призрак」「вечность」「жертва」「воскресение」「новый」「справедливый」などの語を引いていくと、どの

ような場面で、誰が関わる概念であるかが明示され、精緻に織られたテクスチャーを通して、この作品の世界を構成している論理システムが具体的に浮かび上がってくるように思われた。

あるいはまたこんな時にも本書はこちらの問いかけに答えてくれた。ラスコーリニコフの告白を受けたソーニャが大地への接吻をうながす場面で、「そうすれば神はあなたに生を送ってくれるわ」と言う。ここは **жизни пошлет** と書かれている。そこで **жизни** という項目を見ると、46回使用されていることが分かる。これを検討すると、そのほとんどが前置格と帰属や関係を示す生格であり、62例使用されている **жизнь** の形の用法を併せて見ると、他動詞の目的語で生格を使っているのは『罪と罰』ではこの箇所だけと知れる。作者はここでは特に「**жизнь**」をまとまった一つのモノとしてよりも、「生きるエネルギー」というような数量的な概念として独特な使い方をしていると言えそうである。あるいはまた、「**преступление**」に関しては「神や良心とはなんのかかわりもない」というような指摘が日本でなされたこともあるが、聖書のロシア語のコンコードダンスによればこの語は聖書の中で、実は「過ち」や「違反」の意味で、「**грех**」の意識をもたらず、きわめて重要な役割を果たしていることが知れる。では小説においてこれらの語はどんな意味で出現するのか？⁽⁶⁾さらには既に市販されている CD-ROM 版の英語訳 CRIME AND PUNISHMENT の検索機能と併用すると、たとえば「白い」あるいは「黒い」などの色名を表す語がロシア語原文と英語訳とでは使用回数に差が出る。翻訳の場面でどの箇所の表現が変化し、消えてしまったのか、といった問題もたやすく検証できる。本書は無限と言ってもよいほどの可能性を秘めており、使用する側の動機に応じて様々の回答を用意してくれる。

本書を日常的に使用するなかで感じることを一つ書きとめておきたい。見出し語に続いて配列されている使用例の順は、キーワードの次に続く語の冒頭のアルファベットになっているようだ。おそらくはコンピュータ操作上の必然性があるのかと思われるが、これを小説中での出現の順に配列することは不可能なのだろうか。それによって語の使用法の変化、意味の異同等がプロットの運びと連動して見えてくると思われるのだが。

本書「まえがき」によれば、北海道大学文学部ロシア文学講座とスラブ研究センターによる研究プロジェクト「19世紀ロシア小説のコンピュータによる分析」では「ドストエフスキー以外の作家たちのデータベースの作成と諸作家の文体の比較研究等」までもが目指されているという。安藤氏はまた「現時点で

パソコンを利用したロシア文学研究の課題は、共通に利用でき信頼できるテキストデータを大量に蓄積することと、コンピュータの得意とする単語の検索、リストアップ、数量的処理などをテキスト解釈にうまく結び付けてゆくアイデアを得ることである。この課題の解決には共同研究の輪を広げてゆくことが重要と思われる」と書いておられる。学会全体としても、本書の編者3氏による貴重な経験を生かした指導のもと、組織的にデータを蓄積していくような態勢を整備する時期にきているだろう。

筆者は1977年夏、初めて参加した国際学会に芦川進一氏の提案を携えて行った。帰国して書いた報告には次のようにある。「このシンポジウムで私はドストエフスキイの言葉の語句辞典（コンコルダンス）を作ろうと提案し、これは各国の若手研究者の賛同を得、日本のイニシアティヴで実現し、ユネスコにはたらきかけようということが決まっている。」⁽⁷⁾この時は『おかしな男の夢』を対象とした実験から始めようと、コンピュータ関連で働く友人と検討を始めながら、本文を打ち込む労力など、当時はあまりの問題点を前に途中で放棄してしまった。本書の「まえがき」によれば「本書はひとえに……安藤厚氏の情熱と努力の賜である」とのことだが、限らない困難と試行を克服して実現された、世界に誇り得る大きな業績に心から敬意を捧げたい。

- (1) 浦井康男「Micro-OCP を使った『罪と罰』のコンコードダンスの作成」(「NETWORK 福井大学情報処理センターニュース」Vol.8, No.2. 1994)。41ページ。OEDによる定義。
- (2) 同上、45ページ。
- (3) 安藤 厚「『罪と罰』における「古風な表現」について」(「RUSISTIKA」10. 187ページ)
- (4) Частотный словарь русского языка. М., 1977.
- (5) たとえば В. Н. Топоров. О структуре романа Достоевского в связи с архаичными схемами мифологического мышления. In: Structure of Texts and Semiotics of Culture. Mouton, 1973.
- (6) 詳しくは井桁「ドストエフスキイ『罪と罰』に描かれた聖書」(『聖書をめぐる九の冒険』, ネスコ/文藝春秋社, 1995年, 178～182ページ)。
- (7) 井桁「第3回国際ドストエフスキイ・シンポジウム報告」(「えうゐ」6号, 1978年, 118ページ)